

イギリス初等・中等教育における考古学的要素の活用について

—— CBA の見解を中心に ——

小 林 大 悟

I はじめに	III CBA の考える考古学的要素を活用した 教育の構造
II 学校教育における考古学と CBA の活動	1 ナショナルカリキュラムにおける考古学的要素の 位置づけ
1 イギリスの教育事情と考古学	2 ナショナルカリキュラム「歴史」に基づく考古 学的要素の活用
2 CBA の教育活動	IV おわりに

—— 論文要旨 ——

学校教育において、地域の文化財や博物館などにある多くの考古資料が活用されるようになるにつれて、このような学習をより効果的に行うための教育学的な研究の促進が急務となってきた。イギリスにおいては、考古資料やそれらを調査、研究する際に用いられる考古学的方法論などを含んだいわゆる考古学的要素が、古くから学校教育に取り入れられてきており、また、そのためのさまざまな研究が行われてきた。ここではその中でも特に中心的な役割を果たしてきた CBA (Council for British Archaeology) の研究成果について、検討を行いたい。

イギリスの義務教育にあたる 5 歳から 16 歳までの子どもたちを対象としたナショナルカリキュラムにおいては、核教科や基礎教科と呼ばれる教科が存在するが、「考古学」はその中に含まれない。しかし CBA は、それらの各教科の中で考古学的要素を活用した授業の実践が可能であり、また、そのことにより学習効果を高めることができるといった独自の見解を示している。特に、CBA は考古学的要素のクロスカリキュラム的な活用に着目しており、高い学習成果が得られると考えている。

CBA ではさらに、ナショナルカリキュラム基礎教科である「歴史」に着目し、その中で考古学的要素を多く活用できると考えている。そして、ナショナルカリキュラムで掲げられている「歴史」を学ぶ際の 5 つのキーエレメントを基にして、その中で、考古学的要素がどのように有機的に結びつき、また、どのような学習成果が得られるのかをまとめている。

こういった CBA の研究成果から学ぶべき点は多く、日本においてもそれらを応用できるのではないかとというのが筆者の考えである。

キーワード

対象領域 学校教育と考古学

対象地域 イギリス

研究対象 学校教育・カリキュラム・CBA

I はじめに

1998年9月21日から24日にかけて、イギリス(England)の博物館、遺跡、学校等を訪問し、学校教育における考古学的要素を活用した学習について取材する機会を得た¹⁾。考古学的要素とは、すなわち、遺物や遺跡などの考古資料そのものや、それらを調査、研究する際に用いられる考古学的方法論などをすべて含んだものである。取材中、多くの先生方や、博物館等の教育関係者、そして子どもたちと接触し、貴重な意見を聞くことができた。その中で、考古資料を提供する側と学校教育とがよく連携し合い、さまざまな興味深い教育実践や教材開発が行われていることが明らかになった。そして、それらの試みは子どもたちに好意的に受け入れられ、高い学習成果をもたらしていることが分かった。

近年、日本においても、地域の文化財や博物館などにある考古資料を活用した学習が多く見受けられるようになってきた。このような学習をより効果的に行うためには、考古学的要素を活用した学習に関する構造的な研究が、資料を提供する側、そしてそれらを活用する側の双方において行なわれる必要があると考えられる。今回取り上げる英国のCBA (Council for British Archaeology)は、資料を提供する側のいわば代表格であるが、このような研究に対して前向きな姿勢を見せており、彼らの研究成果から学ぶべき点は多いと言える。ここでは、それらの中から特に、イギリスのナショナルカリキュラムに基づく彼らの見解に焦点を当て、彼らの考える学校教育における考古学的要素活用の構造を明らかにし、検討を行いたい。

II 学校教育における考古学とCBAの活動

1 イギリスの教育事情と考古学

19世紀末から続いた上流階級や中産階級による中等教育独占の状況は、1944年教育法(バトラー法)により崩れ、選抜試験のいらぬ中等学校としてコンプリヘンシブスクールが発展し、イギリスの教育は平等主義的な方向へと傾斜していった。その結果、国民の学力は低下し、国際的競争力の低下が危惧されるようになった。そのような中、競争主義や能力主義を再編させようとする主張が強まり、1988年の教育改革法の成立へと至った。現行の教育制度は、この教育改革に則っている。

では、その内容とはいかなるものか。まず、ナショナルカリキュラムの導入が大きな改革の内の1つである。これにより、それぞれの学校が独自のカリキュラムに基づいて教育を行うというイギリスの伝統的な教育スタイルは終焉を迎え、統一的な教育政策が実施されるようになった。ナショナルカリキュラムが適応されるのは第1～11学年(5～16歳)で、核教科(Core subject: 英語、数学、科学)と基礎教科(Foundation subject: 美術、

地理、歴史、外国語、音楽、体育、技術)が定められた。年齢別に4つのキーステージ(Key Stage: 以下、KSと略)が設けられ、それぞれの段階における学習教科や領域も定められた。また、ナショナルテストが導入され、学校選択の自由が認められるなど、国民の教育に対する関心を高めるための試みが行われた。

このような改革を経た後のイギリスの学校において、考古学はいったいどのように位置づけられているだろうか。主に16歳から18歳が所属するシックスフォーム(sixth-form)と呼ばれる大学進学予備期間においては、「考古学」は選択科目の1つとされている。シックスフォームにおいては2年間にわたり、Aレベル(advanced level examination)と呼ばれる大学進学のための資格試験に向けて、2～3科目に関する特に専門的な学習が行なわれる。この試験で2科目以上を通過すると大学に進学する資格が得られることになる。

「考古学」を選択できる学校はイギリス全体で約30校と言われている²⁾、それほど多くない。しかし、学校選択の自由が認められているため、その気になれば誰でも「考古学」を選択できる環境にあると言える。このようにイギリスの後期中等教育においては、「考古学」は選択科目として一部の生徒によって非常に専門的に学習されているのが現状である。

シックスフォーム以下の学年ではどうか。これらの学年はナショナルカリキュラムの影響下にあり、そこで示されている教科が主に履修されている。考古学はその教科には含まれていないものの、基礎教科に位置づけられている「歴史」では、考古学的要素を取り入れた授業を行うことが奨励されている。そして、「歴史」を中心に、ナショナルカリキュラムのさまざまな教科において、考古学的要素がより多く取り入れられるように努力しているのがCBAである。

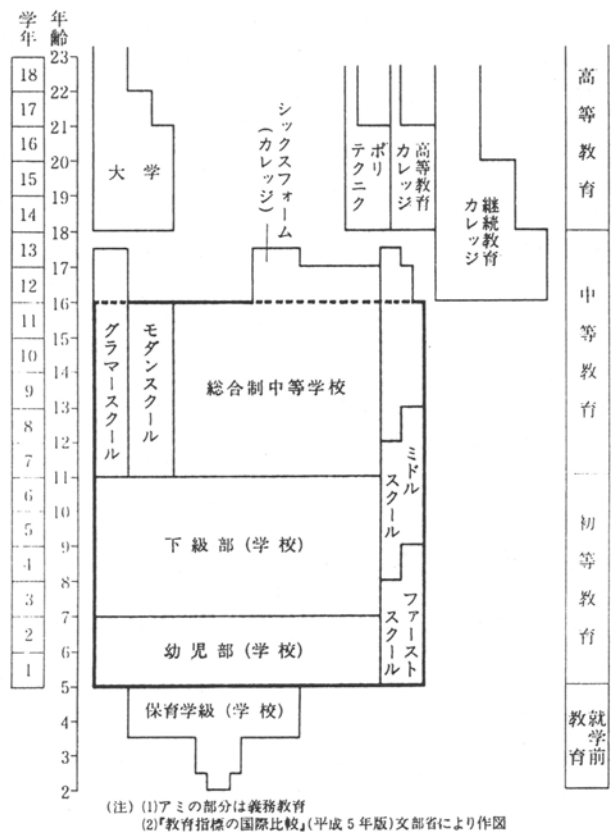
2 CBAの教育活動³⁾

まず、CBAという組織の概要をつかむために、CBA設立の歴史について簡単に触れる。第二次世界大戦中、荒廃する国土から遺跡を守ろうとする考古学者たちが立ち上がった。ロンドン古代遺物学会(Societies of Antiquaries of London)の長であったアルフレッド・クラハム(Alfred Clapham)は、戦後の復興に伴う考古学的調査の必要性について話し合う場が必要であるとし、CAS (Congress of Archaeological Societies: 1898年設立)に働きかけた。その結果、CBAが設立され、その活動はCASによって1944年に正式に承認されることとなった。同年3月、CBAは戦争で破壊された町などにおいて、発掘と再建に関する会議を地方単位で招集した。そして、この地方グループごとに必要な情報が集められ、あらゆる遺跡の視察が行われた。

〈資料 1：イギリスの学校系統図〉²⁾

〈付論 1〉各国の教育制度と教科書

イギリスの学校系統図



〈資料 2：各キーステージにおける学習教科〉³⁾

	KS 1 年齢 5-7	KS 2 年齢 7-11	KS 3 年齢 11-14	KS 4 年齢 14-16
英語 [English]				
数学 [Mathematics]				
科学 [Science]				
体育 [Physical education]				
デザイン技術 [Design & Technology]				
情報処理 [Information Technology]				
外国語 [Modern Foreign Languages]				
歴史 [History]				
地理 [Geography]				
音楽 [Music]				
美術 [Art]				

CBA の設立は、その後の英国で考古学が多方面において発展するための基礎となった。それには、一般大衆からの支援を受けることと、考古学に対する理解を広めることの重要性が、CBA において設立当初から認識されていたことが大きく起因する。CBA は、一般大衆に対する教育的支援に力を注ぎ、考古学の大衆化に大きく貢献した。考古学の大衆化のためには考古学におもしろみをもたせなければならないといった考え方にに基づき、CBA はポスターを作って図書館などに掲示し、広報活動に努めたり、学校の学習過程に考古学を導入するための研究に力を注いだりした。そして、すべての教育レベルにおいて考古学の導入を図るための研究が進められ、学校に対する情報提供や図書の出版などといった活動が盛んに行われるようになった。現在でも行われているこのような活動の基礎は、CBA の設立後わずか5年の内に確立されていたことは驚きである。

このように、CBA は設立当初から幅広く多くの人々に考古学を普及しようと、教育活動に重点を置いてきたことが分かる。CBA は、現在までに築かれてきた風景や環境、そして、人間が過去に行ってきた活動について理解することの重要性について説き続けてきた。そしてさらに、それらを今に伝える環境の多くが現在危機に瀕している状況を示し、なぜそれらを保全すべきなのか、また、どうしたらそれらを守ることができるのかなどについて考えることの重要性について訴え続けてきた。このように、地域の文化財保護を一般市民と一体となって推進しようとしている姿勢からは学ぶべき点は多い。

教育分野への情報提供は、CBA が行っている大きな活動の内の1つである。最近では、学校教育における教材開発を数多くこなしており、『Archaeology Ages 5-16』を作成してナショナルカリキュラム「歴史」における考古学的要素の活用を強く訴え、また、その他にも多くの教材を世に送り出している。

教育分野の専門職員は、考古学や教育学の専門家の中から幅広く厳選、採用されている。これらの職員らによって、教材研究が日々行われており、それらの成果を基にして、教師に対する教材の提供や助言を行うなどの支援が行われている。また、発掘情報や資料に関するさまざまな情報のデータベース化が着々と進んでおり、情報提供がよりスムーズに行われるようになってきている。このように、CBA においては、学校との連携を図りながら、教材研究や情報提供に力が注がれている様子が分かる。

考古学教育 (archaeological education) をさらに広め、情報収集、情報公開の機能を強化するために、各地域においては ELO (Education Liaison Officer) ネットワークが設立されている。ELO の主な役割は、学校、大学、博物館等と連携し、考古学や教育に関する情報を収

集、公開することとされている。この ELO によって、継続的に教師への支援が行われたり、また、GCSE⁹⁾ (General Certificate of Secondary Education) や A レベルなどの資格試験において、考古学的要素や考古学そのものがより多く取り扱われるように働き掛けが行われている。今後の ELO の活動が大いに注目される。

III CBA の考える考古学的要素を活用した教育の構造

CBA は学校教育への考古学的要素の導入に積極的な姿勢を示しており、ナショナルカリキュラムの内容を受け、『Teaching Archaeology — A United Kingdom Directory of Resources』⁷⁾や『Archaeology in the English National Curriculum: Using Sites, Buildings and Artefacts』⁸⁾などの教師向けの参考図書を出版している。前者は、イギリス、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドを対象とし、考古学的要素を活用した授業を行うには、どこでどのような資料が手に入るか、また、どのような考古学者が協力してくれるかなどを示した目録である (以下、『Teaching Archaeology』と略)。後者は、イギリスのナショナルカリキュラムに基づいた授業に、考古学的要素をどのように取り入れたらよいかについて解説を行っている、日本で言う指導書のようなものである (以下、『Archaeology in the English National Curriculum』と略)。本章では、この2冊の内容を中心に CBA の考える考古学的要素を活用した教育の構造について明らかにし、考察を行う。

1 ナショナルカリキュラムにおける考古学的要素の位置づけ

CBA は、学習において考古学的要素を活用することにより、過去について分析したり解釈したりする際に用いられるスキル⁹⁾ (skill) が身に付くとして、考古学的要素活用の重要性を強調している。そして、これらのスキルは多くの生活場面や他の教科を学ぶ際にも役立つものと考えている。このようにスキルが重視されている背景には、ナショナルカリキュラム「歴史」においてスキルが重視されているという事情があり¹⁰⁾、法的拘束力をもったナショナルカリキュラムの目標に忠実に沿うかたちで考古学のよさをアピールしようとする意図が感じられる。また、よき市民の育成をめざし、偏見を排除し、正しく過去を認識するためのスキルを身に付けさせる傾向は、アメリカやオーストラリアなど他の先進諸国でも見られ¹¹⁾、スキルを重視するのは、このような傾向に沿うものであるとも考えられる。

考古学的要素を活用した学習においては、広く多くの分野に応用可能なスキルの習得が可能であるとされているが、これは考古学そのものが、地理学や科学などの諸

学問の成果を応用して発展してきた経緯からも容易に理解できる。このことは、教科領域を横断的に統合させて展開し学習するクロスカリキュラム¹²⁾において、考古学的要素を活用した学習が、その中心的役割を担える大いなる可能性を秘めていることも意味する。1993年からSCAA (School Curriculum and Assessment Authority) を中心に進められたナショナルカリキュラムの改訂作業では、法規で制定された教育内容の削減や学校裁量枠の拡大が行われ、その中でクロスカリキュラムが重視されるようになった。このような流れも背景にしながら、CBA はクロスカリキュラムにおける考古学的要素の有効活用を訴え、次の3点をクロスカリキュラムの利点として挙げている：

- * 異なるいくつかの教科からアイデアや情報が持ち寄られたときに、生産的で良い活動が行われる
- * 異なるいくつかの教科を同時に学習することにより、ナショナルカリキュラムにおける作業負担を調整できる
- * 実際に結果が得られる活動を行うことにより、子どもたちのモチベーションを高め、学力を向上させ、強い興味・関心を引き出す

…考古学的要素の活用はこのような学習において最適である¹³⁾

それでは、それぞれの教科において考古学的要素が有効活用できるという根拠は何か。『Teaching Archaeology』では、イギリス、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドにおけるそれぞれのナショナルカリキュラムに於いて、学校教育において考古学的要素が活用できる可能性について述べられている。中でもイギリスに関しては、「歴史」「地理」「デザイン技術」「情報処理」「科学」「英語」「数学」「美術」「外国語」「宗教 (Religious Education)」¹⁴⁾といったような教科別に解説がされている。その多くが「歴史」に費やされているものの、幅広い分野における考古学的要素の活用が期待されている様子がうかがえる。表1は、「歴史」以外の教科に関する本書の見解を著者がまとめたものである。

表1からも分かるように、風景や環境という言葉キーワードにして、考古学との多くの共有部分を有している「地理」においては、考古学的要素の活用が多いに期待されている様子がうかがえる。データ処理の観点からは、「デザイン技術」「情報処理」「数学」などにおいても考古学的要素の活用が考えられている点は興味深い点である。また、考古学的調査を行う際の測量において用いる計算が、「数学」における実用性と関連付けられているが、「数学」の便利さを体験することによって、学習効果も高まると言える。そして、発掘された遺物などに関連して、そのデザインや素材を追求することが「デザイン技術」と結び付き、美術史や芸術の視点から遺物

などを追求することは「美術」と関連するなどと考えられている点も、大いに参考になると言える。また、クロスカリキュラムという視点から、本書におけるこれらの見解をとらえると、考古学をキーワードにして多くの教科同士を結び付けることが可能であることが分かる。

次に、「歴史」における考古学的要素の活用について見てみる。CBA は『Teaching Archaeology』や『Archaeology in the English National Curriculum』において、ナショナルカリキュラム「歴史」に掲げられている5つのキーエレメント¹⁵⁾ (Key Element: 以下、KE と略) に基づいて、考古学的要素活用の根拠を見出している。5つのKE とは次の通りである。

- KE 1. クロノロジー (Chronology)
- KE 2. 歴史に関する知識と理解の広がり と 深さ (Range and depth of historical knowledge and understanding)
- KE 3. 歴史についての諸解釈 (Interpretations of history)
- KE 4. 歴史的探究 (Historical enquiry)
- KE 5. 構成と伝達 (Organisation and communication)

『Teaching Archaeology』では、「生徒は、遺物 (artifact)、写真、自分たちの過去について語る大人たち、文献史料、そして、建築物や遺跡 (sites) などの情報源から、どのように過去に関するものを見つけ出すかについてを教授されるべきである」¹⁷⁾というKE 4 (歴史的探究) に関するナショナルカリキュラムの見解を中心に、歴史学習における考古学的要素活用の重要性について根拠づけている。つまり、遺物や建築物、遺跡などは、まさに考古学で取り扱う分野であり、すべての学習段階 (KS) においての考古学的要素の活用が可能であると考えられている。また、その他のKE に関しても、過去から物理的に残ったものを用いることにより、活用が可能であるとされている。そして、各KE において考古学的要素を活用できる根拠が示されている。それらをまとめたものが、表2である。

KE 1 と関わる遺物や出来事を時間的にとらえる活動においては、具体的にものを用いる考古学的要素の活用は有効であると言える。また、KE 2 や KE 3 と関連して、過去に起きた変化について理解したり、過去につくられたものがなんであるのかについて解釈する際には、考古学的要素を活用することが学習効果を高めることにつながると言えることは、容易に想像できる。

ところで、ナショナルカリキュラム「歴史」には、各KS における学習ユニット (Study Unit) が設定されている。『Teaching Archaeology』ではそれを受け、さらに具体的に、各KS における考古学的要素を活用する学習の可能性について示されている。それらをまとめたもの

〈表1：各教科における考古学的要素活用の根拠〉¹⁵⁾

教科	考古学的要素活用の根拠
地 理	<ul style="list-style-type: none"> ナショナルカリキュラムでは「(風景は) どうしてそのようになったのか? そして、どのように、なぜそれは変化しているのか?」などの疑問に焦点が当てられるべきであると述べられているが、風景を理解するにあたり考古学的要素の活用は有効である 地理学のスキルが考古学者によって多く用いられている (例: プランや地図の作成、野外における器材の使用、航空写真の使用、データに関するグラフの作成、情報処理) 居住の変遷、環境変化などは考古学と関係深い
デザイン 技 術	<ul style="list-style-type: none"> 遺跡や博物館では過去の技術について見学できる 壺、住居、金属器、石器などに使われている素材やデザインにより、また、異なる機能や様式によって、どのように物質が利用され、そして、デザインが変化したかについて観察できる 初期におけるシンプルな技術は、デザインの原則を際立たせ、分かり易くする 過去の技術を学ぶことにより、人間の技術を敬うことを学ぶ
情報処理	<ul style="list-style-type: none"> 考古学者は大量のデータを扱い、遺構・遺物、そして遺跡の全体構造を、遺跡の面で追ったり層位で追ったりする 考古学者はデータを公表したり、情報の分析を行う 考古学的要素を活用することにより、子どもたちは興味深く具体的な問題の処理を行い、またそれらを発表することにより、刺激的に情報処理についてつかむことができる 過去を再構成するなどの考古学的な経験には、興味深くおもしろい課題や問題解決のための練習が含まれる
科 学	<ul style="list-style-type: none"> 考古学の方法論は科学的である 遺跡や遺物の研究において、科学技術が多く用いられている 岩石や土層の特徴によるグループ分け、粘土などが加熱により変化することの理解、金属の原鉱からの溶解などといった物質に関する学習には、考古学的要素が適用できる 電子や磁気から物質を感知する技術について学ぶような物理学の分野の学習にも、考古学的要素が適用できる 放射能はさまざまな年代測定に用いられ、考古学の進展において大きな役割を果たしている
英 語	<ul style="list-style-type: none"> 遺物や遺跡を調べる時に多くのコミュニケーションが行われる 遺物や遺跡について説明することにより語彙を増やすことができる 遺跡や博物館に関するパンフレット作りやレポートの作成などが行われたりする
数 学	<ul style="list-style-type: none"> ナショナルカリキュラムでは、数学は実生活に基づいた実用的な活動において用いられるべきであると述べられており、多くの考古学的調査で用いられる単純な活動がこれに当てはまる (例: 遺跡でグリッド杭を設定するときの直角三角形の使用、発見したものの分類やグループ分けにおける数的な分析、遺物の重さや密度の測定、建物や部屋の計算) データの取扱いについても、考古学的要素を活用した学習を通して教えることができる (例: コンピューターの使用、データのグラフ化、データの解釈、放射性炭素年代測定法などの確率の理解)
美 術	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちがより深く文化遺産を受け入れることを目指し、授業においては過去の芸術家や職人の作品を用いることが求められているが、考古学の分野では、遺物の形状、模様、質感などの研究が行われている (例: 新石器時代の陶器における多様な形状、質感、装飾) 子どもたちは自然や人工的な環境を観察しなければならない 遺跡や遺物は芸術的創造におけるよい参考例となる 過去の芸術的活動は考古学的研究によって明らかになることがある (例: ローマ時代や中世の壁絵や宝石などは子どもたちの造形活動を刺激する)
外国語	<ul style="list-style-type: none"> 旅で外国の遺跡を訪れたりするが、パンフレットが外国語で書かれていることがある 子どもたちの言語使用を促進するために、遺跡を活用して状況を具体化させる
宗 教	<ul style="list-style-type: none"> 長年にわたりどのように信念が変わってきたかについて、そして、数千年の間にさまざまな信念が英国において遵守されてきたことについて、考古学はその証拠を明らかにする 宗教的な遺跡に関する学習は意義がある

が表3である。また、各KSごとの学習ユニットは表4に示した。

本書では、3つのKSの中で考古学的証拠(archaeological evidence)が使用される可能性が最も低いのはKS3であると考えられている。これは一次資料に関する高度な初期学習が行われなければならない時期であるのにもかかわらず、大変残念なことであるとされている。しかし、その反面年齢の下がるKS 1～2では、考古学的証拠が活用される機会も多くなると言える。特に、幼い子どもたちに対しては、ものを通しての歴史学習が受け入れられ易いことに着目している点は興味深い。また、KS 2の学習ユニット「地域の歴史」では先史時代の学習が可能であり、先史時代を学習することの利点を強調し、考古学的色彩の強い先史時代の売り込みに力を入れている様子がうかがえる。先史時代と有史時代の解釈の相違を比較することで、遺物や素材に対する先入観を排除できると考えられていることや、先史時代の学習が現在の風景や環境に対する本質的理解につながると考えられている点も興味深い視点であると言える。

CBAはこのように、考古学的要素を、ナショナルカリキュラム「歴史」を中心に、さまざまな教科において高い学習効果をもたらすものとして位置づけている。また、考古学的要素の活用により、クロスカリキュラム的な視点からも多方面のスキルが身に付き、さまざまな領域の学習を同時に行うことができるなどとして、注目していることが分かった。近年、日本の教育においては、生活科や総合的学習の導入といった教科再編の動向が見られるが、こういった中で考古学的要素の活用が、さまざまな教科の内容を有機的に結び付け、学習効果を高めるなどといった重要な働きをするのではないかと期待できる。

2 ナショナルカリキュラム「歴史」に基づく考古学的要素の活用

『Archaeology in the English National Curriculum』では、ナショナルカリキュラム「歴史」に基づいて、そこに掲げられている5つのKEとの関連において考古学的要素をどのように組み込むことができるのか、その構造について詳しく解説している。ここでは、それらについて取り上げ、検討を行いたい。

(1) 5つのKEと考古学的要素

「歴史」において考古学的要素を活用するにあたり、本書では考古学を「後に残った物理的なものを通して行う、過去の人々に関する体系的な研究である」²¹⁾と定義づけている。つまり、「歴史」をものを通して学習するなら、すべての場合において考古学的要素を活用できるという

ことである。そして、発掘だけでなく、物理的、環境的な証拠が考古学に関わるとして、ものを通しての過去に関する学習について言及しているKE 4（歴史的探究）と考古学との強い関連性が強調されている。また、考古学において用いられる分析や解釈のスキルがすべての教科に活用できるという、考古学的要素を活用する学習の強みも示されている。

KEとの関連は特に重要な論題とされている。考古学は、過去の解釈に対して疑問を投げかけるものであり、KE 4で行われるような、あるキークエスションを設定して行う授業に適するという。このキークエスションは、他のKEと考古学的証拠を結び付ける働きがある。例えば、キークエスションが遺物の時間的な前後関係に関するものとする(KE 1:クロノロジー)。だが、それらの遺物は、ある特定の時代における生活や価値観について伝えてくれるという意味でKE 2（歴史に関する知識と理解の広がりや深さ）につながる。それぞれの遺物における相違を確認するために比較を行うこともKE 2に関連する活動となる。また、それらの遺物が博物館でどのように展示されているかについて考えるときに、KE 3（歴史についての諸解釈）とも関連をもつことになる。そして、これらの検討を通して分かった結果を伝えるという行為がKE 5（構成と伝達）になる。これらの構造を分かり易く示しているのが、資料3の図である。

資料3の図の、「歴史的探究」はKE 4に、「解釈」はKE 3、「知識と理解」はKE 2、「クロノロジー」はKE 1、そして「構成と伝達」はKE 5に対応していると言える。この資料3に基づき、あるキークエスションを出発点とした具体的な学習展開を簡単に示しているのが資料4である。1番目のキークエスションでは、ピクトリア時代の遺物と現在使用されているものとの類似点や相違点が問われているが、この答えを探すために、遺物に対し比較、検討、分類などが行なわれることになる。そして、最後にそれらの結果が発表されるという一連の流れが、すべて資料3の図に基づいて行われることが分かる。考古学的要素を活用した歴史学習においては、このように資料3の図のような一連の流れとなるようなキークエスションを設定できるかどうか、成功の鍵を握っていると言える。

このような資料3の図に基づいた考古学的要素を活用した学習では、多くの考古学的証拠が用いられることになるが、考古学的証拠を用いる際の留意点とは何か。本書では、このような学習が適切に考案、構成されるためのガイドラインとして、次のことを示している²⁴⁾。

- * 学校の「歴史」に関する指導計画(policy document)においては考古学的証拠の使用について言及されているか、そして、それが各KSごとの計画に組み込まれているかを確かめる

〈表 3 各KS・学習ユニットにおける考古学的要素活用の可能性〉¹⁹⁾

	活用を推奨する学習ユニット	考古学的要素活用の可能性
KS1	(学習ユニットなし)	<ul style="list-style-type: none">• KS1で対象となる幼い子どもたちは、ものを通しての過去の学習を、非常によく受け入れる（彼らにとって、過去は書かれた言葉よりもものを通しての方が受け入れやすい）• 過去と現在との比較は、博物館の展示物で簡単に行うことができる
KS2	<ul style="list-style-type: none">◆ 英国におけるローマ・アングロサクソン・バイキング◆ 古代ギリシャ◆ ヨーロッパ社会以外の歴史	<ul style="list-style-type: none">• ローマ・アングロサクソン・バイキング時代の遺物を展示した博物館はたくさんあり、古代ギリシャやヨーロッパ以外の歴史に関する展示も、地方の博物館などで見られる（どんな収蔵があるかを博物館に尋ねることは失礼なことではない）• 1930年以降の英国：多くの教材が用意されている• チューダー時代の生活：学習すべき建築物が今でも使用されており、学校の関係なら無料で見学できる• ビクトリア時代の英国：20世紀初頭の家屋、店、教会、道路に満ちた環境で私たちは生活している• 地域の歴史：証拠(evidence)に関する学習はこの地域の歴史において最初に学習される（先史時代における証拠は時代の長さに深みを与え、当時の技術が後の時代のものと異なる例を示す）• 先史時代と有史時代を比較することにより、遺物や素材に対する先入観に挑むことになる• 先史時代の理解は、現在の風景や環境が築かれてきた様子を本質的に理解することにつながる（多くの考古学者が先史時代に関する情報提供を行っている）
KS3	<ul style="list-style-type: none">◆ 中世の王国：英国 1066－1500◆ ヨーロッパ社会以外の歴史	<ul style="list-style-type: none">• ヨーロッパ社会以外の歴史：文献などによる証拠が豊富• 1914年以前のヨーロッパ史におけるある時代、または、転換期：新石器革命などが含まれ、博物館には初期の農具に関する展示があり、現風景の中に当時の名残がある（地方の考古学者がそれらの場所に関する情報を提供してくれる）• 中世の王国：英国 1066－1500：考古学的証拠は豊富であり、大聖堂など、このころの多くの建築物が現在も使用されている• 時代が新しくなるにつれて、物理的に残ったものを通しての学習が大いに可能になる（例 産業革命によってもたらされた生活の変化）

〈表 2：各KEにおける考古学的要素活用の根拠〉¹⁸⁾

KE	考古学的要素活用の根拠
KE 1	<ul style="list-style-type: none"> 遺物や出来事を適切な順序に並べることやデータの入手法などは、考古学と関わりがある 博物館などの遺物を年代順に並べことは、異なる物質の物理的状態が時代によってどのように変化しかについて理解するのに理想的である 発掘現場などでは、地層の堆積状況から年代を知る方法をとっている
KE 2	<ul style="list-style-type: none"> 過去の社会がどのように機能していたか、そして、どうして変化が起きたのかについて理解するにあたり、多くの考古学者が関わってきている 考古学に関する文献を見ることにより、何がなぜ起きたのかについては異なる見方が存在するということを知ることができる
KE 3	<ul style="list-style-type: none"> 文献史料よりも考古資料の方が、容易に解釈の相違が見える 博物館の展示、歴史的建造物の内装、廃虚が展示されているものなどを活用することにより、解釈を行う練習となる
KE 4	<ul style="list-style-type: none"> KE 4に関するナショナルカリキュラムの見解が、直接考古学と結びつく
KE 5	<ul style="list-style-type: none"> 調査計画を立て、それらの結果について伝達することは考古学者によって行われている

〈表 4：ナショナルカリキュラム「歴史」における各KSごとの学習ユニット〉²⁰⁾

	学習ユニット
KS 1	(学習ユニットなし)
KS 2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英国におけるローマ・アングロサクソン・バイキング 2. チューダー時代の生活 3 a. ビクトリア時代の英国 3 b. 1930 年以降の英国 4. 古代ギリシャ 5. 地域の歴史 6. ヨーロッパ社会以外の歴史
KS 3	<ol style="list-style-type: none"> 1. 中世の王国：英国 1066－1500 2. 連合王国の成立：王族、議会、そして民衆 1500－1750 3. 英国 およそ 1750－1900 4. 20 世紀の世界 5. 1914 年以前のヨーロッパ史におけるある時代、または、転換期 6. ヨーロッパ社会以外の歴史

- ＊ すべての学習ユニットにおいて、調和のとれた考古学的証拠が用意されているかを確認する
- ＊ 学校によってどのような考古学的証拠が利用できるかを探し出す
- ＊ 地域やそれ以外において、学習ユニットに関連した遺跡や建築物を訪問する機会があるかを確認する
- ＊ 歴史的環境や発見された資料の活用にあたり、教師に対する現職教育が必要かについて決める

学校の指導計画に考古学的証拠の使用を盛り込むことや、学校独自で使用可能な考古学的証拠を探し出すこと、そして、それらの実施にあたって現職教育を行うことなど、各学校における自助努力が望まれていることが分かる。これは反面、努力を行いさえすれば、考古学的要素を活用した授業を行うことが可能な環境にあるともとらえることができる。使用可能な考古学的証拠は地域によって異なるため、学校の所在地により、さまざまな授業実践が行われることになる。資料3の図や考古学的証拠を用いる際のガイドラインは、このような学校独自の実践を行う際の中軸となるであろう。

このように、考古学的要素の活用をカリキュラムとの関連で構造的にとらえて示したり、各学校における実践の際のガイドラインをまとめたりすることは、学校における考古学的要素の活用を容易にし、より多くの実践が行われるようにするための重要な働きをしていると言える。考古学的要素の活用を日本においても広めるためには、学習指導要領や学校における年間指導計画などの検討を行い、その中で考古学的要素の活用がどのように位置づけられ、どのようにしたらより良い実践に結びつくかについて、示して行く必要があると思われる。

(2) 先史時代と有史時代の学習における考古学的要素の活用

本書では、先史時代と有史時代の両方の学習において、それぞれの特徴を生かした考古学的要素の活用法があると考えられている。では、その考えとはいかなるものか。

まず、先史時代に関してであるが、先史時代の学習において考古学的要素を活用することは、「地理」や「歴史」を通して簡単にできるとされている。まず、「地理」に関してであるが、現在見る風景は何千年にも及ぶ土地開発の結果であり、考古学的要素の活用なしでは、どのように、なぜ環境が変化してきたのかを理解し、未来に対する教訓を学ぶことができないと考えられている。また、「歴史」においては、「地域の歴史」(KS2)、「英国におけるローマ・アングロサクソン・バイキング」(KS2)、「1914年以前のヨーロッパ史におけるある時代、または、転換期」(KS3)といった3つの学習ユニットで考古学的要素の活用が可能であるとされている。そして、考古資料を活用した実用的な活動を通じた学習により、文献史料不

在がかえって有利な方向へと転ずる可能性も示唆している。また、そのような授業の実践にあたり、情報を提供してくれる資料そのものや、各機関ごとに可能な活動を示しているのが資料5である。授業を実践するにあたり、その活動内容に応じて適切な支援機関が示されていることから、支援機関の層の厚さやそれらの機関と学校との連携が機能していることが分かる。

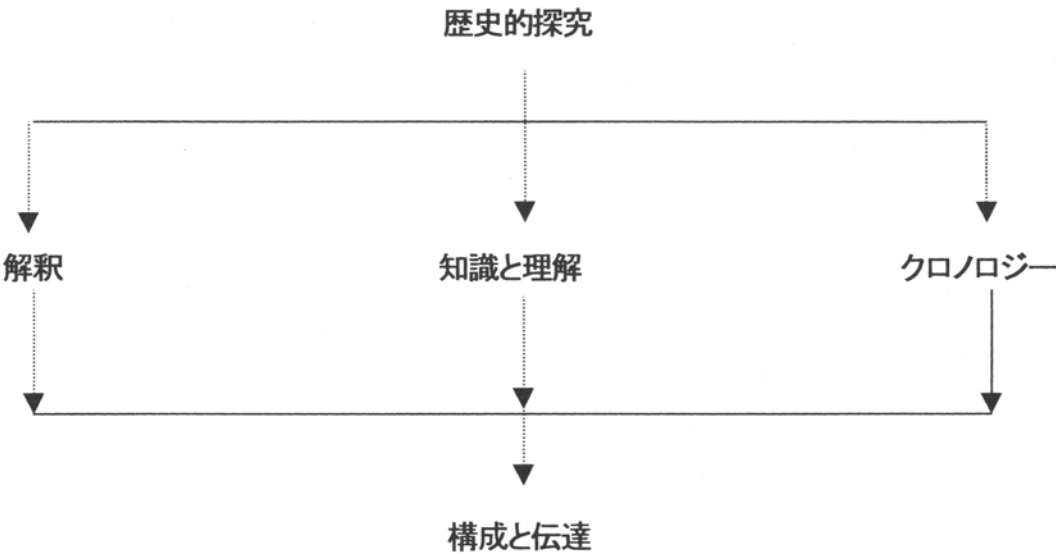
次に、有史時代に関してであるが、ブリテン島における文献の記述は、BC.55年のカエサルCaesarの南東部遠征に始まると言われている。しかし、より一般的になるのはキリスト教会が設立される7世紀頃である。このようなことから、有史時代初期の大半やそれ以降においても考古資料がもっとも重要な情報源となると考えられている。そして、ビクトリア時代などの比較的新しい時代においてもなお考古資料は重要な資料として位置づけられ、情報を提供し続けているとされている。一般に考古学とは先史時代のみを扱うものという先入観があるが、いかなる時代においても考古学的要素を活用した授業が行えるということを示している点は、授業における考古学的要素活用の可能性を広げる重要な視点であると言える。

また、このように、文献による記述が行われるようになって以降も考古資料が重要視されるのは、文献史料と考古資料は共に一長一短あるものと考えられていることも、その理由として挙げられる。それらを示しているのが、次の資料6である。「歴史」を学ぶにあたり、考古資料を用いないことは、過去に対する不十分な理解へとつながるというのが、有史時代を学ぶにあたって考古学的要素を活用する必要があることの根拠とされている。文献においては主に当時の権力者について取り扱われることが多く、歴史は政治史であると言われることがあるが、考古資料は幅広く多くの階層に関する情報を提供してくれる。また、ある特定の立場の人間によって記述される文献と比し、考古資料はより客観的な情報を提示していると言える。このように幅広くより客観的に当時の社会について理解するためには、いかなる時代においても考古資料は貴重な情報源になると考えられる。

資料7は、それぞれの時代における考古学的証拠の使用例を示している。表からは、有史時代においても、身の回りにある多くの考古学的証拠が授業に活用できるということが分かる。これには、イギリスにおいては文化財の保存状態が良好であることも関係している。そして、考古学的証拠の具体的な活用例としては次の5つが提案されている³¹⁾。

- ＊ 昔の写本のスケッチから復元された衣装を使用する
- ＊ 過去の有名な人々の生活へと子どもたちを導くために、当時の衣装を再現した映画などを使用する
- ＊ 地図上や実際の土地から、中世における領土の境界

〈資料3：KEに基づく考古学的要素を活用した歴史学習の構造〉²²⁾



〈資料4〉²³⁾

歴史的探究	概念的要素 (Conceptual elements)	構成／伝達
キークエスション： ビクトリア時代の遺物(object)は、私たちが現在使用しているものとどのように類似し、または異なるか？	活動： ビクトリア時代の遺物と現代の物を組み合わせ、継続と変化を見る（知識、クロノロジーの幅と深さ）	活動： 遺物を分類するために、ベンダイアグラム(Venn diagram)を使用する。遺物を単純な年表の上に置く
キークエスション： このモザイク模様はローマ時代の人々の趣味や価値について何を私たちに伝えてくれるか？	活動： 中身、デザイン、創造、そして色合いなどの証拠を見つけるため、そのモザイクを検証する（知識の幅と深さ）	活動： 発見したことを描いたものに注釈を付ける
キークエスション： 城はどのように、また、なぜ変わったか？	活動： 中世の城の写真を並べ、城に訪問した際にさまざまな時代の特徴を見出す（クロノロジー、知識や因果関係に関する幅や深さ）	活動： 変化を描いた年表を製作する

〈資料5〉²⁵⁾

資 料	可能な活動	詳 細
SMRs ²⁶⁾	配置の構想を練る	地図上の遺物、現場、そしてモニュメントなどから構想を練り、それらを風景と結び付ける。
博物館	遺物の分析	遺物の分類やグループ分けを行う。原形を求めて陶器の破片を復元する。
ビジターセンター ²⁷⁾	経験することによる過去の再現活動	穀物を挽く、簡単な窯を使用しての陶器の製作する。自然の植物から食料を収集し備える。石器を製作し使用する。紡いだり編んだりする。
EH／NT ²⁸⁾	現場とモニュメントの調査	測量を行い、平面図または絵図面を取り、出版されたものとそれらを比べる

に関する綱領から得られる証拠についてを調べる

- ・ ビクトリア時代の建物案内図を用い、その場を実際に訪れ、どのように建築物や娯楽施設が変わってきたかを示す
- ・ 第二次大戦で爆撃を受けた町に関する報告書を用い、その場所を訪れ爆撃の影響に関する証拠を見つける

このような例に基づいて考古学的証拠を用い、見たり触れたりする授業においては、ただ文献だけを用いるよりも、歴史的事象が生徒たちの心に明確に刻まれ、歴史を実用的に彼らの生活へと結び付けることができると期待されている。考古学的証拠が子どもたちの身近な生活と歴史を結び付ける働きがあるのとらえているのは、重要な視点であると言える。歴史をただ遠い過去のこととしてとらえるよりも、現在の生活とも関係する出来事であるとして身近にとらえることにより、子どもたちの歴史学習への興味・関心が高められ、理解をより容易にすることができると考えられる。歴史学習における考古学的証拠の使用にはそのような可能性を秘めているのである。

(3) 各 KE と考古学的要素の結びつき

考古学的要素を取り入れた歴史学習としては、KE4で行なわれるようなキークエスションを設定して過去に疑問を投げかけるような学習を軸とし、その他の KE とも関連させながら学習を進める方法が考案されていることは前にも述べた。それでは、各 KE と考古学的要素はどのように結びついて、効果的な歴史学習へと導かれるのであろうか。本書においては、「時間の感覚」「継続と変化」「過去の解釈」「伝達」というようなテーマごとに、各 KE と考古学的要素との関連が明らかにされている。各テーマは、それぞれ、KE1、KE2、KE3、KE5に対応しているものと考えられる。ここでは、各テーマごとにその詳細について明らかにする。

○「時間の感覚」

時代とは近代の産物であり、過去を研究するにあたって便宜的につくられたものであるが、歴史家だけでなく考古学者も時代区分を行う。なぜ、時代と時代との間に境界線が引かれたかについて、疑問をもつことは重要であるとされている。そして、歴史学と考古学とではこの境界線が異なるところに引かれることがあるとして、その例が示されている(資料8)。このように、既成の時代区分に対して疑問をもち、時間に関してはさまざまな解釈があるのだということを理解することは、KE1(クロノロジー)に関わってくる。

子どもたちに時代について説明するにあたっては、まず、変化の概念を確立させることが必要となる。これは、子どもたちの両親、祖父母などを一つの世代として時代

区分することにより、説明できると考えられている。その後、子どもたちを物的証拠へと結び付けるには、異なる時代の遺物を現在のものも含めて並べ替える活動が有効であるとされている。また、年代配列の信頼性には常に疑問をもつことが重要視されている。そして、年代は実体のあるものと結び付けられることにより子どもたちに受け入れやすいものとなるとして、考古学的にもと結び付けて年代を考えることの重要性が強調されている。

時代区分が絶対的なものではなく、それぞれの立場の違いからも時代区分は異なってくる。その事例として考古学と歴史学の時代認識の差異を取り上げている点は、子どもたちが時代区分の概念について理解する際の好例になると考えられる。また、現代も含めて異なる時代の遺物の年代配列を行うなど、子どもたちと身近なものから、ものを通しての時代認識へと結び付けようとする発想は大変重要であると言える。

○「継続と変化」

考古学においては、年代を通しての変化と継続に関する研究が行われてきている。これは KE 2(歴史に関する知識と理解の広がりと深さ)に関連し、KE 1における年代に関する学習の延長線上にあると考えられている。変化と継続に関する学習においては、ある特定のテーマに基づいて、複数の時代を対象とすることが効果的であるとされている。

実際に変化と継続について教える際には、遺物や、建築物、風景などを見たりする活動が含まれなければならないとされており、それらについて「何が変わったか?」「何が変わらず残ったか?」「それらが変わったということがなぜ分かるのか?」などと問い掛けることが重要だと考えられている。また、子どもたちにとっては、彼らが現在も使用しているものとの比較を行うことにより、変化について理解し易いと考えられている。そして、そのような活動には、地域の博物館にある、比較的新しい展示物を用いることが理想的であるとされている。

例として示されているビクトリア時代のアイロンを年代順に並べる活動は興味深いものである(資料9)。子どもたちは、アイロンの形状や燃料、材質などから彼らが製造された年代を推測し配列を行う。そして、実物を手にしながら変化や継続とは何かについて学ぶことになるのである。

このように、あるテーマを設定し、まずは身近な比較的新しい時代のものとそれぞれの時代におけるものとの比較が行なわれる。そして、そこから変化した部分や継続して残った部分についてその理由を考えることにより、理解を深めようとしているところが特徴である。そして、このような活動を通して、歴史に関する知識が広がり、また、深まると考えられていることが分かる。実物を用

〈資料 6〉²⁹⁾

証 拠	長 所	短 所
文献	個人の証言 人々の生活や出来事に関する詳細な記述 政治思想、宗教的信念、個人的態度に関する情報	特定のものから生み出される： 教会、公、知識階級 根拠のあやふやな残存物 偏見の見方
考古	すべての社会階層を象徴している 大規模な変革を反映している 社会経済や環境に関するデータを提供している	非人間的 断片的 解釈に難しい

〈資料 7〉³⁰⁾

時 代	考古学的証拠
ローマ	町、田舎の開拓村落
アングロサクソン	埋葬の習慣、農業の風習
バイキング	農場、工芸
中世	町の発展、教会
チューダー朝	田舎の邸宅、修道院の解散
スチュアート朝	チャールズ 1 世と国会との戦争(Civil War: 1642～52)の古戦場
18世紀	近代陶磁器産業の成長
19世紀	初期の工場、道路、運河、そして鉄道
20世紀	戦争の時代の要塞、郊外の住宅

〈資料 8〉³²⁾

例	カリキュラム「歴史」では中世は1066年のノルマンジー公ウィリアムによるイギリスの征服により始まる。この年代周辺で何が変わり、何が変わらなかったのか？
歴史学	変化：新しい王、フランス語を話す上流貴族、英語に代わりラテン語が公文書に使われるようになる、新土地所有法、王家の森の法、フランス国内の戦争との関わり 継続：政府の構造、法
考古学	変化：新建築（大聖堂、城、教区教会） 継続：生活様式、町と村の場所、貿易、貨幣制度、陶器の製造、芸術

いて直接比較が行えるということは、考古資料活用の強みと言える。子どもたちが博物館等で考古資料を実際に手に取り、自らの感覚で歴史をとらえる主体的な活動からは、歴史に対する深く正しい理解が生み出されることが期待できる。

○「過去の解釈」

考古学においては、過去から残ったものを再構成することによって過去の解釈を行う。このような活動は、KE 3（歴史についての諸解釈）と結びつくと考えられている。異なる人々や目的により、それぞれ異なる方法で過去は表現されてきた。誰もが過去の対する先入観をもっており、過去をより正しく解釈するには、それらが証拠と結び付けられる必要があるとされている。また、子どもたちは、ある出来事に対して疑問をもち、自ら解釈を行おうとしたときに、その出来事に対してよりよく理解できると考えられている。このような考えに基づき、あるいくつかの資料に対してはどのような疑問がもたれるべきかについて示しているのが資料10である。

歴史とは、その解釈を行った人間によって創り出されたものであり、それらの解釈に対して疑問を持つことは重要なことである。この疑問を、博物館の展示方法や歴史家や考古学者といった異なる立場によって行なわれた表現等に適用し、より正しい解釈へと導こうとしていることが分かる。日本の学校教育で博物館訪問が行なわれる場合、博物館の展示に対して疑問を持ち、批判的に考察するといった視点はまだ定着していないように思われるが、このような視点は重要であると言える。

○「伝達」

考古学者は研究過程の最終段階で、研究成果の発表を行うが、このことはKE 5（構成と伝達）に関連するとされている。子どもたちも、博物館や遺跡で観察したことなどを記録する。この記録を行う際には適切な用語が使用され、専門用語を学習する機会にもなっている。また、記録したことを表現する際には、最も適切な伝達方法について考えることになる。資料11は、それぞれの目的に応じてどのような方法があるかについて示している。

ここではまた、子どもたちの伝達能力を高めるには、遺跡や博物館を訪れて生の物質に触れる機会を得た際に、次のような活動を行うと効果的であるとされている³⁶⁾。

- * 創造的随筆；例 あなたはローマの調理壺である。あなたの人生の物語を書いてみよう。
- * 演劇によるロールプレイ；例 あなたが訪れた修道院が抑圧されるという場面設定で劇をつくってみよう。
- * 展示；例 学校であなたの地域の歴史に関する展示を行ってみよう。

- * パンフレット；例 地域の教会へ訪れる人のために、パンフレットをつくってみよう。

歴史学においても考古学においても、研究の最終段階としてその成果の発表が行われるが、ここでは考古学における発表方法が学習に応用して示されている。遺跡を訪れたり、本物の遺物を手にしたときの感動は大事にしたいものである。創造的随筆や演劇によるロールプレイなどは斬新な伝達手段であると言えるが、対象となる事物に対する共感的理解や幅広い知識が要求される高度な活動と言えよう。そして、発表の際に適切な用語や表現を用いたりすることにより、言語の知識が高まり、またグラフなどを作成することにより、情報処理や数学の学習にもなるというように、多くのスキルを発展させることが期待でき、伝達に関わるこれらの活動も重要であると言える。

(4) 資料と証拠

キークエスションを設定し、それを基にその答えを見つけて行くような歴史的探究に基づいた授業においては、いかに正確な証拠を資料からつきとめられるかがその成功の鍵を握っていると言える。考古学者が証拠をつきとめる際に最も重要としている資料は、遺物、建築物、遺跡の3つであると言われている。本書においてはこの3つの資料に基づく考古学的要素の活用について触れられているが、その内容について見てみることにする。

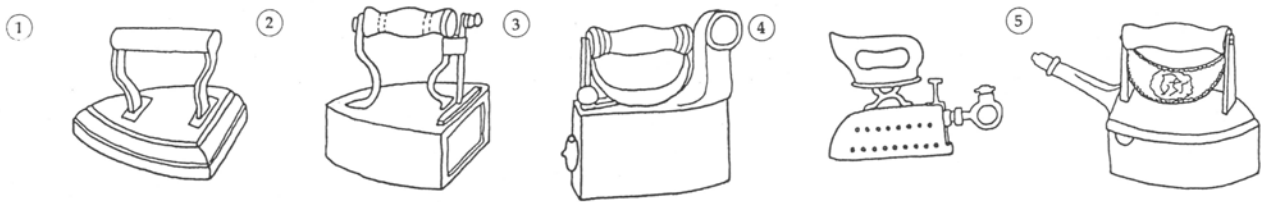
○「遺物」

「教師からの千の言葉よりも1つのものを手に取ることの方が、子どもたちにとっては価値がある」³⁷⁾との認識がイギリスにおいては広まっているようであるが、本書では遺物を学習に用いることにより、観察、評価、解釈のスキルが高められると考えている。また、遺物に対して疑問をもち、それに答えて行く過程で、理由付けの力が着くなどの効果が期待できるとしている。他の教科にも応用できるようなスキルとしては、遺物に対して仮説を立てて結論へと至ることが「科学」へ、また、遺物に対する正確な測量と記録を行うことが「技術」へと応用できるとしている。

このような遺物を用いた学習においては、地方の博物館や考古学学会などの諸団体が、遺物の貸し出しや教師の相談にも応じるなどして支援を行っているようである。また、このような団体の中にはワークシートなどの教材を作成している所も少なくない。

このように、遺物を用いた学習からは、さまざまな有効なスキルが身につく、子どもたちの興味・関心を高めるためにも効果的であろう。また、学校以外の団体が、学校教育に対して遺物の貸し出しや教材開発、学習相談などといった支援を行っていることは興味深く、学ぶべき点であると言える。

〈資料9〉³³⁾



〈資料10〉³⁴⁾

ねらい：過去は表現されたものであり、それには異なる方法があるということを確認する	
資料	疑問
本のイラスト	この絵の対象や構成について、あなたはその他にどのようなものを見てきたか？そして、それらはどのように異なるか？
博物館、または、遺跡	この博物館や遺跡においてどれだけ多くの表現方法を見つけることができるか？（例：模型、life size reconstructions、living history、絵画、CD ROM、音声ガイド、ガイドブック、ビデオ）
ねらい：過去は解釈されたものであり、それには異なる方法があることを理解する	
表現の比較	表現は異なる人々によって行われるものであるから、それぞれの表現が異なるのだと思うか？（例：歴史家、考古学者、芸術家、ジャーナリスト、小説家）
イラストの年表	何が変わってきたか？そして、私たちがより多くのことを知ってきたからそれが分かるのか？それとも、それは私たちの考えが変わってきたからなのか？
ねらい：解釈に対して判断を行う	
遺跡	遺跡を解釈するにあたりあなたはどのような方法をとるか？そして、その特定の方法をどのように選択したか？
博物館の展示	どのような効果（教育的／娯乐的／感動的）を生み出すことが意図されているか？そして、それがどのように遺跡や遺物についてのあなたの考え方、感じ方に影響を及ぼしているか？
遺跡の模型	考古資料から、その内のどの部分を知ることができるだろうか？そして、空白を生めるにあたって何が使われているか？
ねらい：生徒自身の解釈を奨励する	
遺物	その遺物がどのようにして使用されたと思うか？そして、あなたはその遺物がなんだと思うか？
遺跡	遺跡やそれらの発掘から、異なる部屋の使用目的など、どのような手がかりを見つけることができるか？

〈資料11〉³⁵⁾

目 的	方 法
分類、序列、比較	トピックの構成図、ベン図形、行列、棒グラフ、年表
情報開示	写真、地図、図表、大きさを描いたもの(scale drawings)、大きさを示した模型(scale models)
関係や理由と効果について示す	一覧表(table)、グラフ、ヒストグラム、フローチャート
分析	文章とグラフを組み合わせる

○「建築物」

建築物は、昔の社会がどのような生活や態度を有していたかについての情報を与えてくれるとして、重要な資料として位置づけられている。また、簡単に近づくことができる資料としても考えられており、その例として学校の校舎が挙げられている。校舎が昔はどのようなものであったかについてを調べ、現代との相違を考える活動は有効であるとされている。

このように、建築物は身近な資料として容易に活用でき、かつ重要な情報を有しているという性格上、重要な教材として位置づけられる。特に子どもたちにとって身近な学校の校舎が着目されているが、さまざまな情報の入手が容易で、手軽に実践可能であることから、校舎は注目すべき資料であると言える。

○「遺跡」

遺跡は、発掘やフィールドワークを行うことができ、認識、評価、記録などの歴史的探究におけるスキルを発展させることができるとして期待されている。また、「地理」「科学」「数学」などで用いる実用的な活動も同時に行うことができるとして、期待が寄せられている。学習の際に利用できる遺跡の所在に関する情報は、SMRs などから入手できる。地域にある遺跡を活用した学習から生み出される高い成果に関しては、想像に難くないが、活用できる遺跡の情報が公開されている点は、非常に注目すべき点である。これは、発掘する側と学校教育とが一体となって教育に力を注いでいる様子を物語っている。遺跡の教材としての価値は高く、日本においても、発掘する側による教育目的からの遺跡の開放と、その情報公開が望まれる。

(5) 実地学習の実践

実際に遺跡などで行う実地学習では、安全性の確認などの下調べを行った上で、学習計画を慎重に立てることが重要であるとされている。その際の確認事項は次の通りである³⁸⁾。

- * 現在実行中の一般的探究 (general enquiry) にその訪問がどのように適応されるか？
- * 学習ユニットの中間プランにその訪問がどのように適応されるか？
- * 実地学習のキークエスションは何か？
- * 実地学習によって実施される活動から、今後どのような補足的な活動が発展させられるか？

全体の学習計画における位置づけや、キークエスションをしっかりと定められた上で実地学習が行われることが望まれていることが分かる。

次の段階は遺跡選びであるが、遺跡を管轄する EH や NT などの教育関係職員との打ち合わせなどを通して行なわれることが望ましいとされている。そして、「歴史」

におけるすべての KE をカバーできるようにキークエスションを工夫し、活動計画が立てられるべきであるされている。また、個々のグループの能力や活動内容に応じて、補足的にサブクエスションが設けられるべきであるとされている点は、個別指導の行き届いたイギリスならではの特徴と言える。

そして、次に子どもたちへの安全指導が行われる。遺跡での振る舞いに関するルールは明確にされる必要があるが、それらが校庭でのルールと異なる必要はないとされている。つまり、普段から校庭での安全指導をしっかり行うことで、遺跡における特別な安全指導を行わなくても済むと考えられている。そして、同伴する保護者を対象にブリーフィングが行なわれ、安全対策の強化が図られると共に、実地学習の目的や計画などが説明されることになる。実際に、イギリスで博物館や遺跡を訪れると、かなりの数の保護者が同行しているのを目にする。安全対策を完全なものとし、学習に集中できる環境をつくったり、個に行き届いた指導を行うには、こういった保護者の存在は欠かせないと言える。

遺跡などでは、そこにあった建築物などの証拠が地下にのみ残っていることがほとんどで、近代建築物におけるさまざまな崩壊段階の様子を示した写真を見せるなどして、構造物が崩壊し、埋没する過程を子どもたちに理解させておくも重要だとされている。初めて遺構面を目にした際には、誰もが困惑するものであり、このような備えは重要であると言える。

いよいよ実地学習が実施され、遺跡を訪れる際には、最初は遺跡全体を使うような活動を行うことが理想的であるとされている。これにより遺跡の概観をつかむことができ、また、移動後の子どもたちを落ち着かせる働きもあると考えられている。その後、個々の活動が始まるが、活動用のワークシートを用いる際には、ワークシートが子どもたちの見るものを統制しないように留意すべきだとされている。子どもたちのインスピレーションが大事にされている様子が分かる。

実地学習における子どもたちに対する評価は難しいものの、子どもたちの遺跡に対する反応や彼らの抱いた疑問が指標になるのではないかと考えられている。また、学習成果や KE の達成度なども評価の中心事項となる。計画に対する評価は、子どもたちが楽しむことができたか、運営が旨く行ったか、子どもたちの学習意欲を高められたか、生涯学習へと発展するかなどといった観点から行なわれることが必要であるとされている。

このように、本書では実地学習における計画から終了後の評価までの対策が示されている。ここでは、学習成果や安全性を高めるために、さまざまな対策が詳しく示されており、実地学習への熱意が感じられる。実地学習が単なるイベントにならないように、中間プランの趣旨

に沿うことや、前後の学習計画をしっかりと立てるように言及されていることは重要であると言える。評価に関しては明確な基準などは示されておらず、難しい問題として位置づけられているが、確かに個々のグループがそれぞれの活動を行う中で、客観的な評価を下すことは困難であると言わざるを得ない。しかし、GCSE が関わる場合には、特に実地学習の評価が試験の成績にも反映されるため、評価の基準の明確化が求められるのではないかと。

以上のように本書においては、「歴史」における5つのKEに考古学的要素は有機的に結びつき、学習効果を高める働きがあると考えられていることが分かった。特に、実際にものを使って比較や解釈を行うことは、子どもたちにとって分かり易いばかりか、強い印象を与えることになる。そして、このような学習がすべての時代において可能であり、身近な校舎、街並み、博物館などを活用することにより、さらに充実した学習を行うことができるということが分かった。また、このような学習を支援する博物館等や保護者の存在も忘れてはならない。本書に示されている考古学的要素活用の構造と実践は、制度の違いこそあれ、日本において同様のことを試みる際に、大変参考になるであろう。

IV おわりに

このように、CBAにおいては、ナショナルカリキュラムに沿うかたちで、学校教育において考古学的要素を活用するための研究が、幅広く、そして深く、行われていることが分かった。考古学的要素はさまざまな教科で活用でき、また、それぞれの教科を有機的に結び付ける働きがあるといったクロスカリキュラム的な発想は、今後、幅広く考古学的要素が活用される可能性を示唆している。考古資料のもつ臨場感という特性を利用したさまざまな学習構想は、子どもたちが歴史を身近に、そして空間的にとらえる上で、大変効果的なものであると言える。また、教育目的のために、多くの考古学者、博物館、遺跡等に学校との連携を呼びかけ、取りまとめたCBAの功績は大変大きい。

日本においては、今後ますます、資料を提供する側としての博物館や発掘調査機関と学校との連携した授業づくりや教材研究が求められることになるであろう。そういった中で、今回検討を行ったCBAの見解から学ぶべき点は多く、これらを応用した日本の教育現場での考古学的要素活用の検討は、今後の課題としたい。

註

- 1) 取材内容に関しては、筆者も含めた本取材関係者により上毛新聞社紙面にて連載「考古学教育の旅①～⑦」「考古学を教育現場に生かせ」(1998年11月10日～11月23日)
- 2) 中村哲 1995『歴史はどう教えられているか—教科書の国際比較から』NHKブックス 223頁。
- 3) Riley, Jeff 1997 *A Guide to Getting into Teaching*. Trotman, 32. 掲載の表を日本語訳。
- 4) 取材を行なったOssett Schoolの考古学担当教師Steven Thornton先生による。正確な数字については現在調査中。
- 5) CBAホームページ (<http://britac3.britac.ac.uk/cba/index.html>) 掲載内容参照。
- 6) 1986年に導入された資格試験制度。10～11学年(14～16歳)はこの試験に備えて、9～10教科を選択、学習する。成績が良好な者は次のステップであるシックスフォームなどに進学しAレベル試験に備える。
- 7) Henson, Donald 1996 *Teaching Archaeology: A United Kingdom Directory of Resources*. Council for British Archaeology. 編著者であるDonald Henson氏はCBAの教育担当職員。
- 8) Henson, Donald 1997 *Archaeology in the English National Curriculum: Using Sites, Buildings and Artefacts*. Council for British Archaeology.
- 9) イギリスの教育では、スキルは「主に練習と反復によって身につけられる、肉体的、社会的、精神的な能力」と定義づけられている。Lawton Denis & Gordon, Peter 1996 *Dictionary of Education*. Hodder & Stoughton 199. 参照。
- 10) スキルを重視したナショナルカリキュラム「歴史」に関しては、平子晶規 1998「イギリス「ナショナル・カリキュラム」施行下での歴史教育の展開」(第48回日本社会科教育学会共同研究大会 発表資料)を参照。
- 11) 詳しくは、小林大悟 1999「オーストラリアN.S.W.州中等歴史教育に関する考察—シラバスと教科書の考察を中心に—」『群馬大学社会科教育論集』第8号、を参考に。
- 12) イギリスにおけるクロスカリキュラムの現状に関しては、小林郁夫 1996「イギリスの教育とクロスカリキュラム」『実践 クロスカリキュラム—横断的・総合的学習の実現に向けて』図書文化 133-139頁に詳しく解説されている
- 13) Henson, Donald 1997 op.cit. p.20. より引用。資料12参照。
- 14) 「宗教」はナショナルカリキュラム教科に含まれないが、学校の指導計画に「宗教」が盛り込まれなければならないことは法律で定められている。
- 15) Henson, Donald 1996 op.cit. 3-5. より要約。
- 16) Department for Education 1995 *History in the National Curriculum England*, p.3. より引用。
- 17) Henson, Donald 1996 op.cit. 3. より引用。
- 18) Ibid., p.3. より要約。
- 19) Ibid., 3-4. より要約。
- 20) Department for Education. op.cit. を参考に作表。
- 21) Henson, Donald 1997 op.cit. p.4. より引用。
- 22) Ibid., p.4. より引用。題名は筆者がつけたもの。
- 23) Ibid., p.5. より引用。
- 24) Ibid., p.5. より引用。
- 25) Ibid., p.7. より引用。
- 26) Sites and Monuments Records(遺跡・記念物台帳): その地方のすべての遺物や遺跡に関するリストで、地方機関に保管されている。
- 27) 子どもたちのための実用的な活動が用意されている復元遺跡が増えている。
- 28) English Heritage/the National Trust: 両者の管轄に多くの先史時代の遺跡がある。
- 29) Henson, Donald 1997 op.cit. p.8. より引用。
- 30) Ibid., p.8. より引用。
- 31) Ibid., p.9. より引用。
- 32) Ibid., p.10. より引用。
- 33) Ibid., p.13. より引用。
- 34) Ibid., p.15. より引用。

- 35) Ibid., p.16. より引用。
- 36) Ibid., p.17. より引用。
- 37) Ibid., p.22. より引用。
- 38) Ibid., p.24. より引用。
- 39) Ibid., p.18-21. を筆者が日本語訳。ここでは考古学的要素を活用した授業例として、2つのケーススタディーを紹介する。全文を掲載するにあたっては、編著者Donald Henson氏の許可を得ている。

参考文献

- Moon, Bob 1990 *New Curriculum—National Curriculum*. Hodder & Stoughton.
- Lawton, Denis & Gordon, Peter 1996 *Dictionary of Education*. Hodder & Stoughton.
- Henson, Donald 1997 *Archaeology in the English National Curriculum: Using Sites, Buildings and Artefacts*. Council for British Archaeology.
- Henson, Donald 1996 *Teaching Archaeology : A United Kingdom Directory of Resources*. Council for British Archaeology.
- 中村哲 1995『歴史はどう教えられているか—教科書の国際比較から』NHKブックス 223頁。
- 平子晶規 1998『イギリス「ナショナル・カリキュラム」施行下での歴史教育の展開』(第48回日本社会科教育学会共同研究大会 発表資料)。
- Department for Education 1995 *History in the National Curriculum England*.
- Riley, Jeff 1997 *A Guide to Getting into Teaching*. Trotman.
- ジェフリー・ウォルフオード 1993『現代イギリス教育とプライヴァタイズーション』法律文化社。
- 小林大悟 1999「オーストラリアN.S.W.州中等歴史教育に関する考察—シラバスと教科書の考察を中心に—」『群馬大学社会科教育論集』第8号。
- 小林郁夫 1996「イギリスの教育とクロスカリキュラム」『実践 クロスカリキュラム—横断的・総合的学習の実現に向けて』図書文化
- O'Hear, Philip & White, John 1993 *Assessing The National Curriculum*. Paul Chapman Publishing.
- 志水宏吉 1994『変わりゆくイギリスの学校』東洋館出版社。

〈資料12³⁹⁾〉

ごみ箱の中から分かる生活

場面を創造してみよう。6歳になる子どもたちの集団がお客さんを待っていて、まじめな顔をして輪になって座っている。お客さんは子どもたちの前に来て、ごみでいっぱいになったある一家のごみ箱をひっくり返した。ここで何が行われるのだろうか？ この人はいったいだれだろうか？ お客さんは実は考古学者で（『Teaching Archaeology』に載っている）、ごみについて勉強することで、そのごみを出した人たちの生活が分かるのだということを伝えに来たのだ。

考古学の紹介

ゲームは始まった。空になったキャットフードの缶詰であろうか？ 彼らは猫を飼っているに違いない！ ごみ箱の中に漫画がありそうだ？ 家族に子どもがいるに違いない！ 壊れた皿があるぞ！ 破片同士を接合できるだろうか？ ゲームは継続し、発見に次ぐ発見で、この考古学者は似通った破片を一まとめにした。これは約2000年前にローマ人が入植してきたころの遺物だ。子どもたちはこの新しい収集へと彼らの探知技能を適用した。実は子どもたちは知らず知らずのうちに考古学者になっていたのだ。近代のごみと邸宅の遺跡から出土する物質との違いについての疑問が出され、そしてその答えが出される。ある物質の有無が認識され、ローマ時代の物質に関する更なる疑問が出される。ある壺の底にあるすすだらけの沈殿物が、彼らの食生活に関して何を語るか？、また、壺の形状が、どんなものがどのように調理されたかについて何を語るか？（KE3&4）

この活動は、子どもたちに考古学により明らかにされた歴史の変革の過程についてを教えるプロジェクトの始まりである。このような日々の生活におけるクロノロジーに焦点を当てたプロジェクトは、ナショナルカリキュラム「歴史」において要求されている。しかし、模範となるすべてのプロジェクトのように、それは他の多くのカリキュラム領域にも触れている。ノーザンプトンシャー（Northamptonshire）村にある大きなプライマリースクールによって、支援してくださった先生方の協力によって、その活動は実行された。もし、考古学について適切に紹介するとしたらどうなるか。考古学は大いなる関心と呼ぶ非常に興味深い科目であり、常に答えよりも疑問を多く投げかける科目であると言えるだろう。この興奮を呼び覚ますことにより、子どもたちはこの活動に関する本当の理由を理解し、彼らが継続してディスカッションを行うための刺激と

なるであろう。

ごみを見る

扉を開く前に、ミステリアスなお客さんは一体誰なのかというディスカッションがあった。彼がクラスにいる間は、クラスではこれから行なわれることについての話が注意深く聞かれ、多くの疑問が投げかけられた。クラスでは、彼らがこれまで見てきたものについて議論する段階に入り、学校の他の子どもたちに報告を行った。グループで分類作業が始められると、異なる種類のごみに対してはラベルが用意され使用された：ブリキ、ポット、骨、鉄。その次の日、子どもたちは独自の展示を行い、持ち込まれてきたすべての物に対してさらにラベルが貼られた。彼らはそれぞれのアイテムについて描写し、それらを校内新聞で発表した（KE5）。

考古学は物質的に残ったものを扱うため、対象や物質に対する分類や格付けと関わってくる。そのような活動は数学や科学の重要なパートでもある。子どもたちが邸宅の庭を訪れた後、そこからさまざまなアイテムを収集した様子が描写される。ブリキ、タイル、そしてスレートの破片は、最近の新しい建築においてもしばしば見られる。国産の陶磁器の破片、錆びた釘、粘土でできたパイプの柄、動物の骨、そして10進法化する前のコインがあった。すべての物質が洗われ（もろいアイテムや残留物は洗われるべきではないが）、分類、認識され、そして再びディスカッションや推論を行う際に使われる。

子どもたちはそれぞれのごみ箱の中身を見せるために大きくカラフルなコラージュを作り、物理的に残ったものと人々が生活した様式について集められた情報との間のつながりが強調された。次のステップは、邸宅の周りで見つかった器具に関するより一般的な解釈に至ることと、どのようにそれらが家庭生活を快適にするのに役立ったかについて解釈を行うことである。子どもたちは絵を描き、さまざまな見出しを付けて家庭生活の快適さについて書いた：洗濯、調理、貯蔵など。彼らはそのときさらに、昔の人々はそれらの器具なしにどのように対処できたのだろうかという想像へと導かれるのである。

年表の作成

クロノロジー（KE1）の感覚を養うために出来事や対象を順番通りに並べることは、考古学の中心的な活動である。このような活動は、博物館から借り受けたアイテムや、現物もしくはレプリカなどの見本を使用することを通して、特に教室においてよく行なわれる。3週目に、あるとても

重要な物質が入手された。それは草を刈ったり、洗濯したり、書いたりという活動と同様に異なる活動に対して光を注ぐものであった。毎日用いるアイテムのすべてが過去を持っている—コンピューターに関してでさえ博物館に展示がある—そして子どもたちは比較することに気付き、同時に適切な語彙に関する知識を発展させながら、それらを順序通りに並べる過程へと入る。鉄や付けペン、円形鎌のような古い例を扱うだけでなく、子どもたちはそれらを彼らが用いている現代の道具と比較し、「デザイン技術」に結び付けて集中的なディベートを開始した。長い年表がすでに壁に貼られており、それを彼ら自身の6年ごとの生活スパン、すなわち彼らの両親、祖父母、祖々父母らの誕生日の平均でもって目盛りをつけた。学校が近代的な建物に含まれることから、その建築年月日や前身であるビクトリアビレッジ学校もそれに含まれた。そのデザインは、主に事実上20世紀の生活回想でくられたタイムスパンに集中して構成されてきた。それは子どもたちが、後にチューダー朝やサクソン朝（中世初期）、そしてローマ時代（KS 2）からきた物質とそれらを結び付けられるように企画されているのだが。絵画やある場合によってはある道具の小さな模型が年表に書き込まれた。さらに詳細については、ある道具が始めて発明されたとき、または少なくとも国内市場での利用が可能になったときの記録が含まれた。これらは、主に娯楽と食料に関する2つの出来事と関係づけられているように思われた。

建築物の理解

子どもたちの建築物に対する理解を支援するため、彼らは自分自身の家庭における数週間から数ヶ月間以内の変化について話し合うことを奨励された。これに続いて、新しい学校と古い学校に焦点が当てられ、一連の写真や現場にある証拠から建物の異なる時代同士が関係づけられた。

子どもたちに近いところのこの2つの訪問により、後にその発展の様子などを見学するために訪れることになる広場（green field site）の建物見学が可能になる。校庭の先にある崩壊しかけたガレージや工作場へと足を運ぶのも同じぐらいの価値がある。そこでは、屋根は4分の3ほど腐っており、ガラスは割れ、建物全体がかなり崩壊が進んだ状態にある。ここにおいて子どもたちは成長と崩壊の過程についてより深く学ぶことができる。

遺跡訪問

いよいよみんなを（Cogges Edwardian）の遺跡に連れて行く準備ができた。ここはすばらしい遺跡で多くの活動に向いている。しかし、子どもたちは今世紀初めの生活につ

いて体験し、建物の構造を見るためにここに来た。彼らのために企画された初期の体験は、建物がどんなことを語り掛けてくれるのかについて、知的に話し合い推測することである。過去の生活の側面としては、洗濯、パンやバターの製造、そしてゴミの廃棄が結論づけられた。

遺跡や記念物はまた、過去について現す異なる方法について考えることへと子どもたちを導いた（KE3）。（Cogges Monor）を復元した絵画の写しを検討し、それらを今でも存在し残っているものと比較することによって、子どもたちは、教科書で過去を描いたものを補強するために使用される一種の証拠となるものの存在の重要性に気づき始めた。同伴した保護者たちは何度も質問を投げかけてきた：なぜ、昔の人はそのようにしたのだと思うか？ なぜ、それがそのように使用されたのだと私たちは分かるのか？ なぜ、昔の人たちは私たちにこのようなことを示しているのだろうか。

結 論

この報告は、すべての学習計画の内からいくつかをピックアップしたに過ぎない。それは膨大な慎重に計画されたものを正確に取り扱ったわけではなく、また、考古学と特に関連性をもたない他の多くの活動に触れたわけでもない。それはまさに、よく知られる初等教育（early years education）の原則を示している：知られていることから知られていないことへの移行、そして、複雑な思考は、共に単純なものから築き上げることが一番の方法である。思考、情報、インスピレーションの源として考古学が役立つという意味で、この2つの原則はカリキュラム全体で当てはめられるだろう。

クロスカリキュラムにおける考古学

中等教育（junior education）に基準が置かれていた時代は、例えば、運河やローマといったトピックが基本とされていた。このクロスカリキュラム的アプローチは、専門性に欠け、詳細を見ると計画不十分で病的な活動が多いとして、多くの批判をあびるようになった。ナショナルカリキュラム導入初期においては教科教育が好まれたが、主に次の3つ理由から、初等教育（primary education）で基本とされていたトピック的アプローチが好まれて残ることになった。

- ・いくつかの生産的でとても良いとされる活動は、異なる学科からアイデアや情報が持ちこられるときに行われるのではない。

- ・補強のためにカリキュラムの異なる分野を用いることにより、それはナショナルカリキュラムの作業負荷の調整に役立つのではないか。
- ・本当の結果が得られる活動を可能にすることにより、それは低いモチベーションを克服するのに役立ち、このようにして子どもたちを高い基準へと導く力や強い興味を引き出すことができるのではないか。

考古学はトピック学習にとっては最適な学問の内の1つである。考古学は多くのカリキュラム教科の内容を含み、学校が実際に貢献できるような多くの遺跡が存在する。たとえ、それがただ SMRs に新しいデータを加えるぐらいのレベルのものだとしても。本実践例は、ノーザンプトンシャーの小さな村で行なわれた、ローマ時代の生活の調査に従ったものである。

学校では、この企画を立案、提供したノーザンプトンシャーヘリテージのサービスを利用した。設定されたキークエッションはシンプルで「ローマ時代に関して、私たちの地域で何を見つけることができるか？」というものである。これは学校の長期計画の一部で、秋学期セカンドハーフの5・6年生は、カリキュラムの「科学」における物質の学習と共にローマ史を学習することになっていた。

準備

ここでのトピックは、子どもたちと疑問について話し合われることにより導入が行なわれ、子どもたちのアイデアが書き留められ、詳細な計画と結び付けられた。書物による調査や博物館の訪問は認められていた。また、子どもたちが専門家や興味深い地域住民を訪問したり、「Anglia Multimedia's Romans」という CD ROM を用いたり、最も興味深いものでは、子どもたちに実物を見てまわれる機会を与えるような学習形態を支援するように、教師は指示されていた。活動の初期段階においては、子どもたちがローマ人による征服以前やローマ帝国の初期について見つけ出している様子を見ることができた。年表をあわせ持った大きな表示板がセットされ、BC.600年から AD.500年までの間で起こったいくつかの主要な歴史的事象のところに新聞スタイルの広報が貼り付けられた。

ローマ時代における物質の収集の中で、個々の物質に対して働きかけることに関しては準備されていた。そしてこのことは、最も典型的なローマ時代の遺物に子どもたちを親しませることにつながった。由来も分からない多くのかけらが、科学の実験の際に粗暴な扱いを受けた。ある数学の授業ではまた、フィールドワークを行うための準備を行

い、10メートル四方のグリッド設定を行った。

この企画では、クラスで軍人会を訪れてすばらしい朝を過ごしたり、Cirencester (Corinium 博物館を含む) や Chedworth のローマ時代の邸宅を訪問することなども含まれていた。

フィールドワーク

土地所有者から必要な許可を得ていたこと、そして、適切な技術が使用されるとのノーザンプトンシャーヘリテージの確認を受けていたことから、そのフィールドワークは開始に至った。この活動では、50人の大きなグループをジョレンかけをした場所に連れて行き、他のスタッフの助けを借りて、そこに何が残っているかを見つけるなどした。見つけられたものは、洗ったり、数えたり、重さを量ったり、分析したりするために、グリッド単位でラベルを貼ったポリエチレンの袋に集められた。子どもたちはそれらを勝ち誇ったかのように教室へ持ち帰った。結果は、手作業と同時に蓄積されてきた情報をコンピューターのデータベースから抽出する方法の両方で図表に書き込まれた。発見されたものは1万分の1の地域地図や地域の情報提供者からの情報集に記入され、SMRs や王立史跡協会目録 (Inventory of the Royal Commission on Historical Monuments) にそれらの情報が加えられた。初期における活動は地域の3D模型から始まり、発見された場所に色の着いた旗が立てられた。歩道、道路や路線、そして、泉、池、小川に関する詳細を充実させるために時間が費やされた。この種の活動により、すべてのものは理由があってそこにあるという原則について、子どもたちは考えられるようになり、一步成熟に近づいたと言える。次第に、起伏、水供給、そして、可能なアクセスルートの結びつきのイメージが始まる。

カリキュラムをカバーする

カリキュラムにおける他の分野を加えたり、教室の中にローマ時代の雰囲気をもたらすなどして、その他の活動も進行中であった。英語の時間では、ローマ時代の神話や、古い作家からの注釈、Vindolanda からの手紙などが読まれてきた。ラテン語からの注釈では、子どもたちがいつも見慣れている要素をそこから抽出することができる。そのとき、彼らは綴りの練習として、ラテン語を語源とするルートについて考えることに行き着いた。ローマの題辭を写し取るのに時間が費やされ、ハンドライティングを行う中で、大文字と小文字の関係が追及された。

数学の学習では測量に焦点が当てられ、ローマ時代の方法を用いて簡単な調査が行われた。地図上や現場での活動を通して、同格 (co-ordination) に関する一般的思考へと

発展させられた。また、ローマ人が地域を分別し、土地の区分を行う際に初期のメートル法化を試みたとして、ローマ数字が注目された。スキルはデータの収集と結び付けられ、検索はすべてのグループによって行なわれ、この企画における大きな役割を果たした。

科学の分野では、物質とそれらの成分に重点が置かれた。これは、主な物質の認識や、人工かそれとも自然のものかという分類も含んだ。特に粘土の焼成や鉄の精錬など、元に戻せる変化と戻せないものの見極めに時間が割かれた。子どもたちが自分たちの簡単な窯をデザインして作り、焼いたときに、それらはデザイン技術へと発展する。その他のデザイン技術の活動は、ローマ人が身近な問題にどのように対処したかについて集中した：水の供給、熱管理、そして輸送。子どもたちはまた水路、床下暖房、そしてローマの道について学んだ。

さらに一般の歴史の授業では、その時代の毎日の生活における別の側面を調査すべく、本を用いたり CD ROM を用いたりした。映画「Ben Hur」や「Spartacus」のある場面も、ローマ帝国の規模や壮大さを伝えるために鑑賞された。生活史 (Living History) の専門家とケルト人やローマ系英国人の生活について話し合うなどして、Cirencester への旅と訪問の準備が行われた。現在の都市とローマ時代の町の位置を子どもたちが比較することにより、ローマ時代の英国の地図に学習は集中した。さらに現在の交通網とローマ時代の道路網との比較も行われた。地理的スキルの修練は、地図の作成や、区割り図、航空写真の解釈を含んだ。この企画では、定住の規則性や経済活動に関する理論

的な学習も行なわれた。

子どもたちはローマ人の生活について書かれた手書きの本に、発見したことを記録した。それはついに製本され、そこに調査に関する永久記録を張り合わせた。この本の製作には美術が役割を担った。子どもたちは、ローマの壁や瓶にある装飾モチーフやスタイルについて観察することを奨励された。そして、独自のイラストでそれについてのインスピレーションを描いた。さらに美術の授業では陶器に焦点が当てられ、子どもたちは借りてきたろくろで壺の製作に挑戦し楽しんだ。幾何学的なモザイク模様を施す活動が行われ、完成したデザインは紙のコラージュとして作り上げられ、後に乾粘土の塗装されたテッセラが用いられた。子どもたちはまた、発見した遺物の詳細な観察用スケッチの選別を完成させた。

企画に関する結論

企画は展示によって完成した。そこで子どもたちは、学校のその他の人々、保護者、そして地域の人々と、発見したことについてを共有した。グループごとの発見の要約は、SMRs に結論として載せられた。評価シートにおいて、子どもたちは企画全体が大きな成果となったと評価を下した。訪問を行ったことや訪問を行った者に対しては高ポイントが与えられたが、これは驚きではない。活動は興味深く楽しかったと同時に、刺激的でやりがいがあったと感じられていた。カリキュラムは期待にそうかたちでやり遂げられ、子どもたちはそこに取込まれ、学校が行ってきた活動により考古学も利益を得ることができた。

The Implementation of Archaeological Aspects for School Education at Primary and Secondary Levels in England : A Study of the CBA

KOBAYASHI Daigo

Within the school education, it has seemed more common to utilize the cultural assets which can be found nearby the schools and the artifacts stored up at local museums. To bring good results, promoting pedagogical research into these practices has been necessary. In England, archaeological aspects which include artifacts and archaeological methodology used by archaeologists in their work has been introduced into school education for a long time, and quite a lot of research has been done prior to introducing these programs. The Council for British Archaeology has been at the core of this research. The purpose of this article is to inquire into the study of the CBA.

Compulsory education in England is from the age of 5 to 16, and schools are required to follow the National Curriculum for the duration of the compulsory education. The national Curriculum provides Core subjects and Foundation subjects, however Archaeology is not included in these subjects. The CBA proposes that utilizing archaeological aspects in these subjects is possible and it will achieve dramatic results. The CBA especially suggests of the utilization of archaeological aspects in Crosscurricular approaches and is a firm believer in its success.

In addition, the CBA looks at the teaching of History which is one of the National Curriculum Foundation subjects, and tries to utilize archeological aspects within this subject. According to the 5 Key Elements which are provided for the study of History in the National Curriculum, the CBA proposes that archeological aspects can be connected with these Key Elements and gives many examples.

I am convinced that these studies of the CBA are providing valuable examples for promoting archaeology within Japanese school education and that we can put these theories to practical use.

Key words :

School education and archaeology; England; School education; Curriculum; CBA